

『今月の天候と農作業』

通巻第5680号
10月号
令和5年9月29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

なし

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすいため向こう1か月の気温は高くなる可能性があります。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率60%です。

<1 週目の予報> 9月30日(土)～ 10月29日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 10月7日(土)～ 10月13日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、前線や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 10月14日(土)～ 10月27日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

普通期水稻

1 適期収穫

収穫適期は、全籾数の8割が黄化した時期が目安です。

刈り遅れは、品質低下や食味低下を招くため、適期収穫に努めましょう。また、収量や品質低下を防止するため、早期落水（収穫5日前までの落水）は控えましょう。

2 乾燥調製

乾燥調製は品質や食味に大きく影響する大切な作業です。乾燥作業は、40度以下の乾燥温度で、毎時の水分減少は0.8%以下を意識しましょう。また、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%を目安に調整しましょう。

また、複数の品種を扱う場合は、品種切替時に、機械や袋等の清掃をこまめに行い、異品種混入を防止しましょう。

大豆

1 排水対策等

台風シーズンのため排水溝を整備するなど、排水対策を徹底しましょう。

2 病虫害防除

カメムシ類は生育後期まで莢を加害します。また、ハスモンヨトウは生育期間全般を通して加害します。ほ場をこまめに観察し、適期防除を行いましょう。

ソバ

子実肥大期に入るため、降雨後に停滞水があるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな排水対策を心掛けましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

施設野菜全般

台風等により施設内に水が流入したときは、速やかに施設外へ排水を行い、作物などに付着した泥を洗い流しながら、病害（特に軟腐病）の対策として、殺菌剤の散布を行いましょう。

きゅうり

ハウス抑制栽培は主枝の収穫期で、側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多めのかん水を行いながら、主枝の摘心が遅れないよう注意します。追肥は主枝摘心の1週間前に行い、その後は側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。

促成栽培は定植時期となるため、適期に定植できるように、早めにほ場準備を行いましょう。

ピーマン

促成栽培の整枝は、第3分枝が強い場合は、側枝のねん枝等を行い、主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合は、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の整枝管理に努めま

す。

トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは、定植後の草勢管理のためにかん水量を制限していますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失わないよう注意してください。

いちご

8月中下旬の長雨の影響で、定植後に炭そ病の発生が懸念されるため、余り苗の管理を継続し、発病株の植え替えに備えましょう。

また、同時期に第1次腋花房の分化期となるため、マルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。
(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

食用かんしょ

5～6月に植え付けた分の収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなるため、適期に収穫しましょう。また、種芋は基腐病の発生していない圃場から確保しましょう。

さといも

中生種の収穫と翌年の種芋の貯蔵を始める時期です。種芋は最後まで茎葉がしっかりした株から採ります。茎葉が枯れ上がったほ場のもの、芽つぶれや、スポンジ状のいも(乾腐病の疑い)は、翌年の種芋としての使用は控えてください。

かんしょやさといも等の収穫後の片付け(次作に向けて)

各種病害の伝染環を絶つため、収穫が終わったほ場は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し適切に処分します。ほ場外に持ち出せない残さは細かく破碎し、できるだけ温度が確保できる時期に分解させることが重要です。また、無発病のほ場や種芋採取用のほ場で作業をする時は、病気や線虫の持ち込みを防ぐため、長靴や農機具を洗浄してから使いましょう。

ほうれんそう

加工用は厳寒期に収穫する作型の播種期です。地力が高く排水の良いほ場を選定し、播種前に、深耕や排水溝の整備をします。また、除草剤は土壌水分が適湿の状態に散布すると効果的です。アブラムシ対策の薬剤処理も行いましょう。

たまねぎ

翌春3月以降に収穫する作型の播種期です。かん水が可能で、排水の良い苗床に播種します。播種後は覆土し、十分にかん水した後は、発芽まで乾燥しないよう、籾殻等で覆います。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、戻しかん水を行います。また、樹勢回復のために、窒素成分主体の葉面散布を、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

完熟きんかん

摘果が終わっていない園では早急に摘果を行い、仕上げ摘果で結果数を調整します。

結果中心が7月中旬以降で果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、果実肥大を促進するために高めの温度管理が必要です。10日までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は外気温よりも3℃程度高い温度を目安に加温しましょう。

マンゴー

後期作型の8月剪定園では、全体的に新梢の発生や充実が遅れ、花芽の着生が不安定になります。昼夜の温度をやや高く管理したり、葉面散布を複数回行うなどし、新梢の緑化と充実を早めましょう。

近年、果実の軸腐病の発生が増加しています。ハウス内の胞子の密度を下げるため、昇温開始までに枯れ枝を徹底して取り除きましょう。また、炭そ病の対策のためにも、剪定残さ等は全て施設外に持ち出しましょう。

2 落葉果樹

秋肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分な場合、翌年の新梢発生や開花・結実が悪くなります。そのため根が活発に活動している10月末までに施肥を行いましょう。

ただし、不発芽が多く見られるナシ園では、対策として秋冬期の施肥は見送り、春肥で補うようにしましょう。

(黒木 宏憲)

花き

花き全般

10月に入ると夜温が徐々に低下します。低温による降霜被害や生育遅延を防ぐために、施設栽培では暖房機のメンテナンスと早めのダクト設置を行いましょう。

キク

秋ギク「神馬」は、定植後に10℃以下の低温に遭遇すると、幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがあります。早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めます。

また、気温の低下に伴い白さび病が発生しやすくなるため、適宜ハウス内の換気、予防防除を適切に行いましょう。

スイートピー

中～下旬から発蕾期です。

中旬頃までは、摘蕾により株づくりに努め、一定の葉長に達してから着蕾・開花させます。

デルフィニウム

中山間地は収穫期、平坦地は中旬頃から発蕾期です。

花のボリューム低下を防ぐために、適切なかん水や施肥を行いましょう。

トルコギキョウ

活着不良防止のため、定植後しばらくは十分にかん水し、草丈が10cm前後になった頃からかん水を徐々に控えて根域の発達を促します。

また、生育後半の過剰施肥はプラスチングの発生要因となるため、発蕾までの期間に適宜追肥を行いましょう。

ラナンキュラス

上～中旬は定植の最盛期です。

定植後の株枯れ防止のため、寒冷紗等によりハウス内の温度を下げるとともに、冷蔵中に腐敗が見られた苗は使用しないようにしましょう。

また、生育遅延防止のため、定植初期は十分にかん水し、その後は徐々にかん水を控えて根域の発達を促します。

キイチゴ

収穫期です。

樹勢の維持並びに翌年春からの萌芽促進のため、株あたり3～5本程度のシュートを残し、それ以外で出荷規格に達したものは順次収穫しましょう。

(山塚 裕美)

畜産

家畜防疫対策

令和5年8月30・31日に、佐賀県で2例(国内88・89例目)の豚熱が発生しました。九州では初めての発生であり、県内での発生リスクが高まっています。農場周辺の防護柵に隙間や破損がないかを点検し、野生イノシシ等の侵入を防ぎましょう。

また、鳥インフルエンザは昨年10月28日以降に国内で発生しており、警戒を高める時期にきています。防鳥ネットに破れや隙間がないかを点検し、野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

家畜

今月は、朝夕と日中の寒暖差が大きい時期です。幼畜(子牛、子豚、幼雛)は、温度変化に特に弱いので、風が直接体に当たらないよう板などで幼畜の側面3方向を囲い、電熱ヒーター等で保温しましょう。合わせて、晴天日の昼間は換気をしましょう。

3ヶ月齢までの子牛は寒さに弱く、腹部が濡れた状態のままでは風邪や下痢などの疾病にかかりやすくなります。そのため敷料をこまめに取り替え、床を乾燥した状態に保つようにしましょう。

飼料作物

飼料用イネの普通期栽培では、収穫時期となります。収穫適期である糊熟期から黄熟期で収穫し、適正水分でサイレージ調製をしましょう。また、飼料用トウモロコシも収穫・調整作業の時期となります。良質なサイレージ作りのために、栄養価の高い黄熟期で収穫し、調製作業では、踏圧の徹底により密度を高め、速やかに密封しましょう。

イタリアンライグラスやエンバク等の播種時期です。播種前には土壌分析を行い、適切な肥培管理

を行いましょう。

(藤井 真理)

工芸作物

茶

1 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて芽揃いが良く、摘採が3日程早くなる反面、12月～3月の凍霜害を受けやすくなります。そのため、防霜施設の有無や茶園の立地条件と品種の早晩生等を考慮して実施しましょう。

整枝の時期

整枝は、平均気温が18度以下となる頃を目安に、山間地域は10月上旬、広域霧島地域は10月中旬、沿海地域は10月下旬頃に実施します。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例が見られますが、30cm²内の再萌芽数が20芽以下であれば、収量・品質への影響は心配ありません。一方、秋整枝が遅れると越冬芽の充実不足となり、収量・品質に影響が出てくるため、適期を逃さないよう注意してください。

整枝の高さ

整枝は、最終摘採・整枝面から3～5節上で、葉層を8cm以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の2回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より1～2節高い位置で実施しましょう。

2 病害虫の防除

チャトゲコナジラミ発生地域では、成虫の発生が終息した後にやや深めに裾刈りを実施します。更に、冬期防除(マシン油)を行い、チャトゲコナジラミとカンザワハダニの越冬密度の低減を図りましょう。

(竹田 博文)

しいたけ

1 水管理と環境整備

9～10月中旬は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。水分を多く含んだほだ木は丈夫な原基をたくさん作り、しいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木への積極的な散水に努めましょう。

また、しいたけ発生量の増大や品質向上のため、暗くなったほだ場は、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えましょう。

2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常10月下旬～11月下旬の間で、葉が3～7割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件(日照、標高等)によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めましょう。

(堀川 和也)

たばこ

本年の葉たばこの販売は10月中旬～11月上旬終了予定です。これから販売される方は、出荷するまでに事前の出荷規格確認と適切な貯蔵管理を行うようお願いします。

今月は、来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 ほ地の選定

品質・収量の安定のために、最も重要なポイントである日当たり・風通し・排水・肥切れなど、条件の良いほ地を早期に選定しましょう。

新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作のほ地選定と施肥設計の参考にしましょう。

2 病害防除対策

冬期深耕および耕耘は、土壌環境改善と病原菌密度低下のための重要な作業です。深耕・耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めましょう。

3 良質堆肥の増産

良質堆肥10アールあたり1200kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょう。未熟堆肥などは、型グレーの生出原因となりますので、脱塩処理を行いましょ。また、切り返し作業は、適度な水分状態(60%前後)を保ちながら、月1回程度実施し、腐熟促進に努めましょ。

4 異物・異臭・貯蔵害虫対策

出荷後は、来年作の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓および清掃を行いましょ。

(宮崎県たばこ耕作組合)

農作業安全

水稻の収穫作業など忙しい時期が続きます。作業計画に余裕を持ち、こまめに休憩するなどして農作業事故防止に努めましょ。

内容の詳細について

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局(農業改良普及センター)へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ タバコガ オオタバコガ	並 並 やや多	フェロモントラップ調査で、オオタバコガの発生が平年より多くなっています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫		台風等による大雨でほ場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあります。排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト・ミニトマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)		TYLCVとCCYVはタバココナジラミ、MYSVはミナミキイロアザミウマによって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット(目合い0.4mm以下)を設置し、侵入を防止します。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。 また、発病株は伝染源になるので、必ず抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)		
ピーマン	ヒラズハナアザミウマ		近年、発生量が多い状況が続いています。本虫は花の内部に生息するため、多発してからの薬剤防除は非常に困難です。本虫は青色粘着板による誘殺が効果的であるため、樹冠部付近へ10a当たり300～500枚の設置を推奨します。 なお、青色粘着板には、天敵カスミカメ類も誘殺される可能性がありますので、カスミカメ類の導入ハウスへの設置は避けてください。
いちご	炭疽(たんそ)病、萎黄病 その他の病害虫		苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ばに病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	チャバネアカカメシ ツヤアカカメシ	やや多 やや多	9月中旬までの予察灯誘殺数は、チャバネアカカメシ、ツヤアカカメシともに平年よりやや多で推移しています。地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	やや少 やや少	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期(寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭)に防除します。 収穫前の早生みかん等では、農薬の収穫前使用日数に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや少	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発達防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

